公益財団法人大林財団

研究助成実施報告書

助成実施年度	2012 年度（平成 24 年度）
研究課題（タイトル）	ランドスケープアーバニズムのモデルとしての歴史都市遺構の現代的再生
研究者名※	宮城　俊作
所属組織※	奈良女子大学　生活環境学系
研究種別	研究助成
研究分野	都市計画、都市景観
助成金額	95 万円
概要	本研究は、ランドスケープアーバニズムの概念を適用することによってもたらされる具体的な都市の環境像を構想し、この概念の有効性を検証することが目的である。その端緒となるモデルを、広範囲にわたって歴史的な都市遺構がひろがる奈良・平城京の京域を対象とし、具体的には、古代に構築された都市基盤の上で遷都後の約 1,200 年間にわたって継続されてきた農耕を支えた水系システムと土地利用パターンを手がかりとして、それらが将来にわたって持続可能であるために必要な諸条件を明らかにするとともに、具体的な環境像を土地利用と近郊農地保全のモデルとして提案した。
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（　）は、報告書提出時所属先。

１．研究の目的

本研究課題の主題であるランドスケープアーバニズム（Landscape Urbanism）は、1990 年代後半から 2000 年代にかけて提唱されてきた持続可能な都市開発と再生に関わる新たな概念である。ランドスケープアーバニズムは、先進国において伝統的に採用されてきた建築とそれらを建設する行為によって都市環境を秩序づける方法にかわって、水平に広がる地表面のありよう、即ちランドスケープを再構成する方法の優位性を主張するものである。特に土地の形質である地形とそれによって規定される水系、さらにその上にひろがる植物的自然の相互関係の総体である生態系との親和性が最も重視されるべき持続可能な都市開発においては、後者の優位性はあきらかである。このような学術的な背景のもと、日本においてもランドスケープアーバニズムの概念を適用することによってもたらされる具体的な都市の環境像を構想し、この概念の有効性を検証することが必要である。そこで本研究では、その端緒となるモデルを広範囲にわたって歴史的な都市遺構がひろがる奈良・平城京の京域において構想することが目的である。具体的には、古代に構築された都市基盤の上で、遷都後の約 1,200 年間にわたって継続されてきた農耕を支えた水系システムと土地利用パターンを手がかりとして、それらが将来にわたって持続可能であるために必要な諸条件を明らかにするとともに、具体的な環境像を土地利用と近郊農地保全のモデルとして提案する。

２．研究の経過

①平城京の条坊制による街路ならびに宅地割パターンと微地形の関係の解明

平城京における埋蔵文化財の発掘調査の成果と遺存地割の推定図をベースとして、対象地における地理情報を重ねあわせることによって、街路ならびに宅地割のパターンと微地形の関係を明らかにした。

②水路網の確認による水系と街路ならびに宅地割パターンとの関係の解明

対象地において現存する水路（農業用水路・雨水排水路）のネットワークを水流の方向もあわせて確認し、①において明らかにした街路・宅地割と微地形に重ねあわせることによって、条坊制を基盤として持続されてきた農耕を支える土地利用の仕組みを明らかにした。

③農耕のパターンとそれを支える土地利用の仕組みの解明

対象地において近代以降に行われてきた農耕のパターンを経時的に追跡し、その変遷を確認するとともに、②において明らかにした土地利用の仕組みとの関係を検証した。農耕パターンの追跡では、明時代初期の地籍図と水利組合が所蔵する水利権図を起点とし、1940 年代以降は空中写真を用いた調査を実施した。

④将来的な市街地整備ガイドラインとモデルイメージの検討

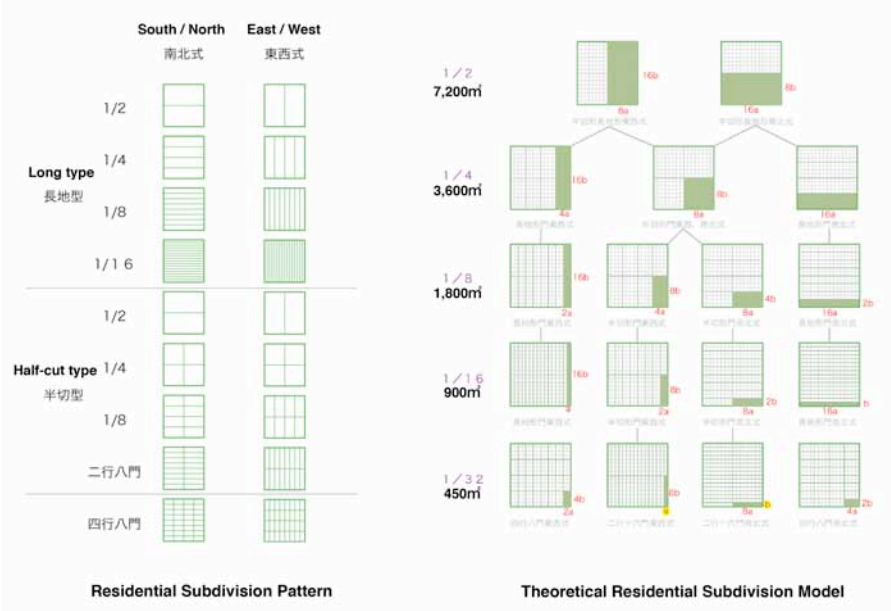
上記の研究成果である持続可能な農耕・水系・土地利用のシステムを前提としつつ、それらと調和的に共存し得る住宅市街地の規模を想定し、それらの分布パターンや集積の密度を検討することによって、将来的な市街地整備と農地保全のためのガイドラインを検討した。また、併せて、ガイドラインの具体的なランドスケープイメージを４つの土地利用タイプごとに提案した。

３．研究の成果

１．ポスト平城京におけるランドスケープの基盤形成

西暦 784 年に長岡京へと遷都された後、平城建都によって不均衡となった自然と人為の関係を制御するだけの権力が消滅した平城京の京域では、人為に対して自然現象が優位となる関係へと、バランスの重心がシフトしたと考えられる。一部の邸宅地や社寺境内を除いて、放棄された土地では農耕が徐々に復活していった。その過程は、河川の氾濫に対処しつつ、自然との間合いをはかりながら、長い時間をかけて土地を使いこなす術を学び実践するものであったものと思われる。そこでは、いやおうなく条坊制のグリッドが農業的土地利用のパターンを規定していたと推察される。排水のためには、道路は宅地よりも低い地盤レベルに設定されていたであろうし、主な道路には幅の広い側溝が掘られていたこともわかっている。寡雨地帯である奈良盆地における農耕、特に水田耕作にあっては、側溝を踏襲した水路のネットワークの維持は決定的な意味を有していたから、条坊制の街路パターン、さらには街区内の宅地割りのパターンが、その後の農業景観の見えない基盤となってきたことがわかった。このように、ポスト平城京から中世、近世を経て近代に至る時間は、大規模な自然環境の改変の後に発生したリバウンドを調停してきた期間に相当し、近代以降のランドスケープ形成の基盤が形成された時期に相当する。

これらの基盤の上に生成されるランドスケープに、ある程度の形態的な根拠を与えるためには、条坊制の空間的な基本ユニットとの関係を検討しておくことが必要であった。そのためには、平城京の条坊制宅地割のプロトタイプから出発して、様々な規模の農−住環境のユニットと、そこで営まれる農と住の関係を検討してみることが有効であるものと想定された。すなわち、条坊制の最大規模の宅地である一町四方（約 14,400 ㎡）から、それを 1/2、1/4、1/8、1/16、1/32 に分割した宅地が基本ユニットである。これらを組み合わせ、さらに水路のネットワークを組み入れることによって、営農タイプから分区園タイプ（約 450 ㎡）までの、多様な農−住ユニットを想定できる。（**図−１**）これらがモザイク状に配列され、京域の全体にちりばめられることによって、先に述べたような人と土地・自然との関係のプロセスの総体が現代的に表現された歴史的風致が形成される、という仮説である。



図−１　条坊制の宅地割を基盤とした土地利用の基本ユニット

一方、ポスト平城京の時代に、自然現象と人為の関係が調停されていくうえで河川と水路がはたしてきた役割は見逃せない。特に条坊制の街路と地割りのパターンに規定されてきたとおぼしき河川と水路のネットワークは、農業生産のための利水と河川の氾濫からの速やかな復旧を可能にするシステムとして機能してきたことが確認された。このネットワークは、上記の農−住環境の中に組み入れられることによって、現代の農業生産に必要不可欠な利水と総合治水による安全性の確保を担うことが期待される。さらには、農地と水系のネットワークが奈良盆地を取り囲む「大和八重垣」のより広域的な自然環境に連接することによって、エコロジカルなネットワークが形成されてきたと考えられる。

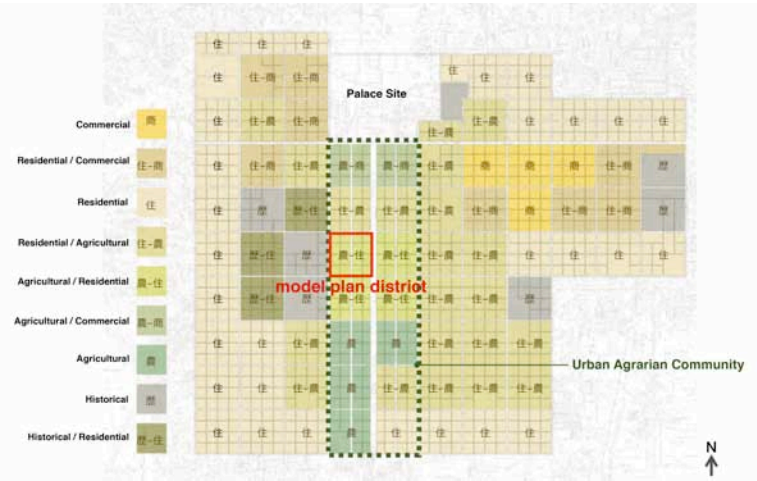
２．持続可能な農と住

平城京の京域に残存するまとまった農地は、その大部分が市街化調整区域内に立地しているものの、就農人口の高齢化や後継者不足は深刻な状態にあり、一部には耕作放棄地も目立つようになっている。これらの農地を保全していくうえでの、ここでの一つのモデルとして、住まいと農を組み合わせた新しいタイプの住環境を構想し、持続可能な環境の基盤をランドスケープアーバニズムのモデルとして提示することが考えられる。一方では、人口減少時代に対応したコンパクトシティ、地産地消を可能とするローカルな生産と流通のシステム、総合的な治水による安全安心な環境、生物多様性の保全と再生など、大都市近郊の地域への社会的要請多様である。このような課題に対して、今後、このような持続的な農と住を基盤とした住環境に対する需要は十分に見込まれるものと思われ、モデルとして一定の価値が見込まれる。

３．農−住環境を想定したランドスケープアーバニズムのモデル

①土地利用の構想

平城京域全体の土地利用の構想においては、いわゆる都市計画の線引きや用途地域指定などの制度的な諸条件を前提とするのではなく、坊をひとつの単位として、それらのグラデーショナルな変化によって、全体を構成するという手法をとることが有効であると考えられる。具体的には、商業、住宅、農業の３つの土地利用のカテゴリーを設定し、それらの組み合わせにおいて、濃淡をつけることによって、連続的に変化する土地利用パターンを形成した。（**図−２**）むろん、この構想にリアリティを求めるためには、現状の土地利用、とりわけ幹線道路のネットワークや建築物の集積密度などを勘案したうえで、それらをグラデーショナルな土地利用の下地とすることも必要である。



図−２　条坊制を基盤とした土地利用ユニットによるゾーニングとモデル街区の位置

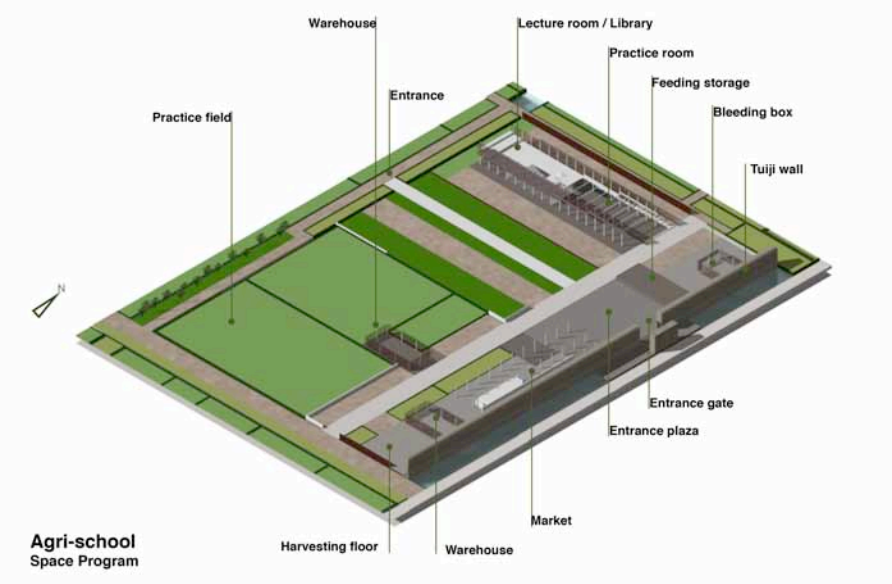
②Agrarian Community

平城京域の中央部において、現状で多くの農地が残存している部分のうち、朱雀大路の両側にひろがる部分を、この構想の中核的なエリアとして整備することが考えられた。この部分を Agrarian Community として、詳細な計画を提案した。具体的には、朱雀大路の西側で現在の西の京に近い「五条西一坊」をモデル街区としてとりあげ、　全域を農–住環境のモデルコミュニティとして提案するために、以下の４つの施設群のプログラムを設定し具体的な空間と景観のイメージを創出した。（図−３）

図−３　モデル街区のマスターデザイン

②−１　アグリ・スクール（agri-school）

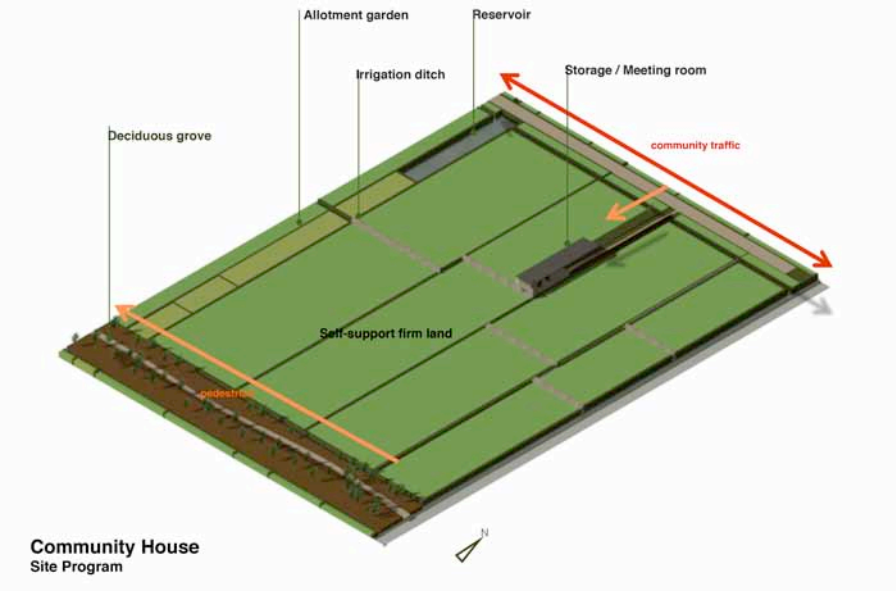
地域に開かれた農業学校を中心として、様々なレベルにおいて農に関わる機会を提供する施設として整備される。また、ファーマーズマーケットや実習農場などを併設し、地域コミュニティの交流施設としての機能をあわせもつものとする。



図−４　アグリ・スクールの空間構成

②−２　アグリ・ストレージ（agri-storage）

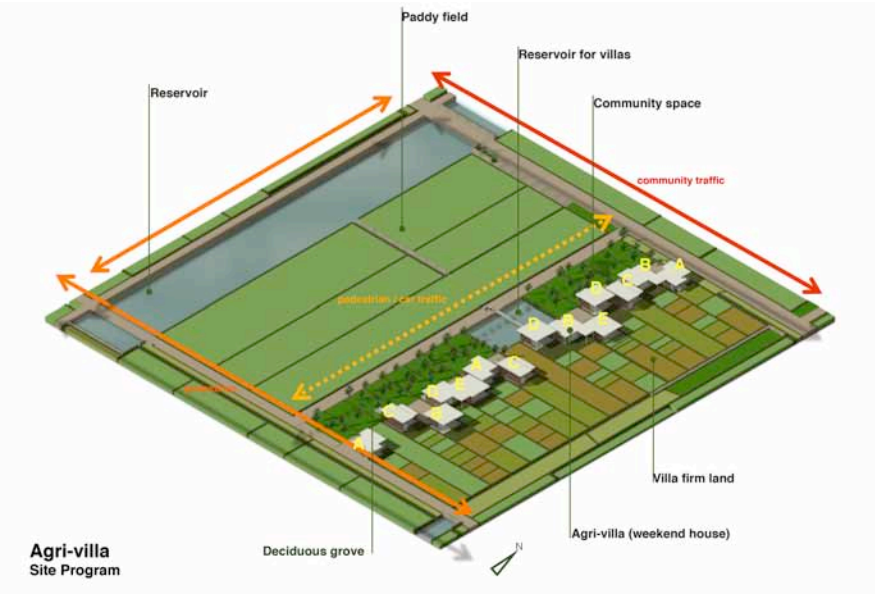
共同の営農を前提として、収穫物を一時的保管や、農機具庫としての機能をもつ小規模な建築物。コミュニティの集会施設的な性格もあわせもち、奈良盆地北部の開放的なスケールの中で、寺院の伽藍や「大和八重垣」の稜線を遠望することのできる場となる。



図−５　アグリ・ストレージの空間構成

③−３　アグリ・ヴィラ（agri-villas）

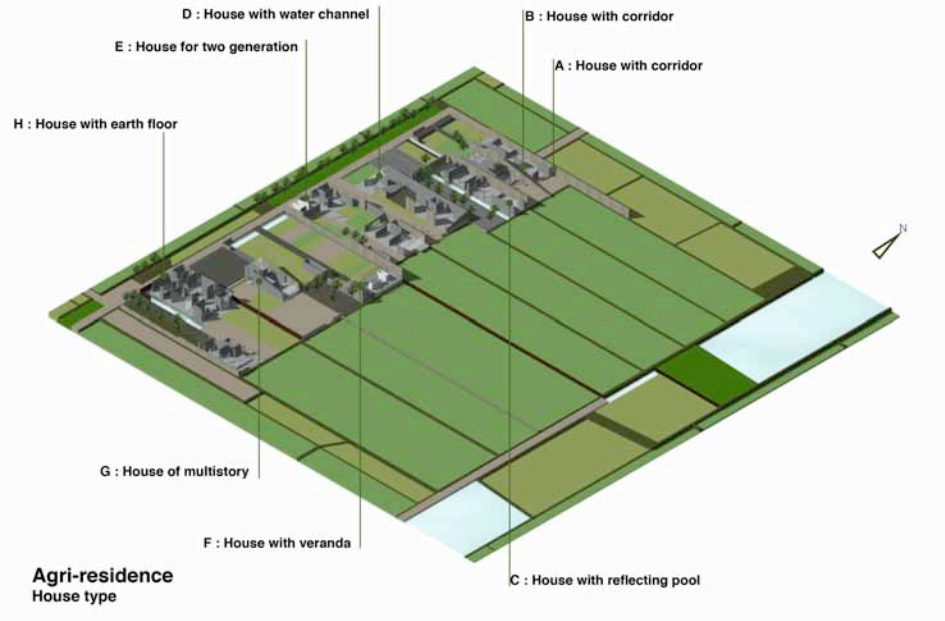
主として週末や休日に農業に従事することを指向する都市居住者が、いわゆるクラインガルテン（Klein Garten）として賃貸もしくは所有する小規模な週末住宅群。東西方向に長い短冊状の敷地に、住宅と農地をセットにして配置し、東と西への眺望を確保できる開放的な空間構成としている。



図−６　アグリ・ヴィラの空間構成

②−４　アグリ・レジデンス（agri-residence）

平城京域にまとまった耕作地を所有または借地することによって、本格的な営農をめざす家族が居住する農家住宅群。伝統的な農家のプランをもとに、それらを現代的にアレンジした空間構成とする。遠景においては、奈良盆地に散在する環濠集落のイメージを建築の群造形として表現する。



図−７　アグリ・レジデンスの空間構成

なお、これら４つのタイプの施設群の建築は、条坊制の宅地割りパターンにみられる基本ユニットをベースとして、それらの組み合わせによる敷地形態を想定したうえで空間造形をほどこすものとする。これにより、基盤としての条坊制が、立体的な群像形として立ち現れることを期待する。

４．今後の課題

本研究でとりあげた歴史的都市遺構などを含む新たな文化財のカテゴリーとして文化的景観を位置づけた文化財保護法、景観の価値に法的な根拠を与えた景観法、文化財を核とした地方都市の活性化を支援する歴史まちづくり法、ここ数年のうちに相次いで制定施行されたこれらの法制度と施策は、歴史的遺構を抱える都市や地域のまちづくりに多様なとりくみの継ぎ手をもたらしつつある。これらの諸制度の効果を現実のものとするためには、それぞれの都市や地域が、めざすべきまちづくりのヴィジョンを明確にもっていることが重要であり、そのためのモデルを構築するための方法論としてランドスケープアーバニズムの概念を適用することには、相応の効果があることが検証されたものと思われる。

もとより、それぞれの都市や地域には、起点となる時代から現在に至るまで不断に続く歴史的なプロセスがある。そこに現代的な意味を見いだし、光をあてることによって、固有の価値を創造する手がかりが見えてくるわけであるが、ランドスケープアーバニズムは、そのための糸口をさぐる有効な方法であることを、より広範な対象において実証していくことが必要であり、その適用の範囲をひろげていくことが今後の最も重要な課題である。